The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「ハイピァリァン」と「ハイピァリァンの没落」の同一性と差異性 : (1)テーマについて
Author(s)	安藤, 幸江
Citation	Osaka Literary Review. 1972, 11, p. 79-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25713
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「ハイピァリァン」と「ハイピァリァンの没落」の同一性と差異性

——(1)テーマについて

安　藤　幸　江

はじめに

キーツには「ハイピァリァン」と「ハイピァリァンの没落」という二つの詩があります。共に未完成です。かってはどちらが先に書かれたかについて議論がありましたが，現在では「ハイピァリァン」がまず書かれて，その後「没落」（以下「ハイピァリァンの没落」をこう呼びます）が書かれたということが定説となっています。[(1)] この小論ではこれら二つの断片詩を，テーマという観点から比較し，その相違点，共通点を具体的に指摘することにより，両詩の特性を明らかにしたいと思います。

1　キーツの意図したテーマ

キーツの意図したテーマの一つが，ハイピァリァン，或いはもっとはっきり言いますと，ハイピァリァンの没落であるということは，両詩に与えられた題名からはもちろんのこと，彼の次の手紙からもわかります。1818年12月18日，キーツはアメリカに移住した弟夫妻に次のように書いてます。

> I think you knew before you left England that my next subject would be 'the fall of Hyperion.'

ハイピァリァンはギリシャ神話のサターンの支配していた「黄金時代」の太陽の神です。ギリシャ神話によれば，サターンはジュピターに王位を奪取され，以後「銀の時代」に入ります。又，ハイピァリァンの地位もア

ポロが占め，更に後者が詩歌と音楽の神も兼ねたのは周知の通りです。

テーマのもう一つはアポロ，或いはアポロの神化 (apotheosis) です。これは1818年1月23日にキーツが友人の画家，ヘイドンに出した手紙からわかります。キーツは次のように言っています。

> ……and one great contrast between them (***Endymion*** and ***Hyperion***) will be ……that the Hero of the written tale being mortal is led on, like Buonaparte, by circumstance ; whereas the Apollo in Hyperion being a fore-seeing God will shape his actions like one. (引用文中括弧は筆者。)

この手紙が示していますようにキーツはアポロを「ハイピァリァン」の主人公と考えていました。そしてこのことは「没落」においても同様であると思います。なぜならキーツは「ハイピァリァン」と「没落」とを区別して考えてはいませんから。

上述の二つのテーマを選んだということは，1818年に出版された「エンディミオン」の序文でキーツが言ったことが成就されたことを示しています。この序文は同年4月10日付のもので，次のようです。

> I hope I have not in too late a day touched the beautiful mytohlogy of Greece, aod dulled its brightness : for I wish to try once more, before I bid it farewel.[(2)]

美しいギリシャ神話がキーツの想像力に翼を与えたのでした。

2 テーマの完成度

では，これら二つの詩はそれぞれ，ハイピァリァンの没落とアポロの神化というテーマをどの程度までこなしているでしょうか。両詩共未完成で，「ハイピァリァン」は Book Ⅲ, 136 行目の途中（136行目は一語だけ）で，「没落」は Canto Ⅱ, 61 行目までで筆が断たれています。Canto という分け方と Book という分け方の違いは，よく指摘されますようにミルトンの「失楽園」とダンテの「神曲」の影響の表われの一つと思われます。即ち，「失楽園」は Canto で分けられ，「神曲」は Book で分けられています。そして，こういう小さな，形式的なことだけではな

く，詩全体の調子からも「ハイピァリァン」は「失楽園」の影響を受け，「没落」は「神曲」の影響を受けているということが言われています。しかし，これらのことに関しましては別の機会に譲りましょう。

さて，ここではそのテーマから考えて，これら二つの詩がどの程度まで完成されているかを調べてみたいと思います。「ハイピァリァン」の方は，没落の不安におびえているハイピァリァンの心情は彼自身の口でもって語られます (Book Ⅰ, ll, 227—250)。又，アポロの神化も途中まででではありますが，描き出してあります (Book Ⅲ, ll. 108—136)。ここにその最後の部分を引用します。

——At length
Appollo shriek'd ; ——and lo ! from all his limbs
Celestial * * * * * *
* * * * * * *

(*Hyperion*, BookIII, 11. 134—6)

ここで「ハイピァリァン」は断絶しています。一方，「没落」では不安におびえるハイピァリァンの姿はモネータの口を通して間接的に語られるのが主です。そして実際のハイピァリァンの姿の描写は数行しかありません。

Anon rush'd by the bright Hyperion :
His flaming robes stream'd out beyond his heels,
And gave a roar, as if of earthly fire,
That scar'd away the meek ethereal hours
And made their dove-wings tremble ; on he flared
* * * * * * *

(*The Fall of Hyperion*, Canto II, 11. 57—61)

そしてここで「没落」は終焉しています。ハイピァリァンが自らの心情を自らの口でもって語るところまでは物語は進んでいないのです。ましてやアポロは影も形も表わしていません。序でながら，「没落」のこの個所は「ハイピァリァン」の第一巻，227行目に相当します。ですから，両詩をハイピァリァンの没落とアポロの神化の物語とのみ見る場合，「ハイピァリァン」においてその物語が第三巻，136行目まで進んでいるのに対し

て，「没落」では第一巻，227行目までしか進んでいないことになります。

ところで，出版者の広告によれば，「ハイピァリァン」は「エンディミオン」と同じ長さになるはずだったそうです。

The poem (*Hyperion*) was intended to have been of equal length with *Endymion*.[3] （引用文中括弧は筆者。）

もしこれが本当であるならば，「エンディミオン」にならって，「ハイピァリァン」もそれに等しく約四千行の詩になるはずだったわけです。ところが，「ハイピァリァン」は934行で，約四分の一しか完成されていません。「没落」にいたっては529行で約八分の一しか完成されていません。これでは書き出しで止まってしまったとしか言いようがありません。詩全体の構成とか中心思想とかがキーツの中でまだ明確なイメージを取っていなかったのではないでしょうか。では，次に意図したテーマをキーツが両詩でどのように取り扱ったかを見てみましょう。

3　テーマの取り扱い方

「ハイピァリァン」はハイピァリァンの没落とアポロの神化を述べた無韻詩の形をとった純粋な物語です。登場人物はハイピァリァン，アポロの他はサターンをはじめとする没落したタイタン達だけで，全くのギリシャ神話の世界です。この意味でこの詩は，ミルトンの「失楽園」や遠くはホーマーの「イリヤッド」のような古典的な叙事詩に属します。もちろん，この叙事詩の中でキーツは登場人物を通して哲学的なことを述べ，価値判断を行い，彼の人生観を示してはいますが。ところが，「没落」ではハイピァリァン，サターン等タイタン達の他に，「私」（詩人）が登場するのです。「私」が登場するという点ではこの詩はダンテの「神曲」と同じであり，又，ワーズワースの「プレリュード」に代表される近代的或いはロマン主義的叙事詩に属します。「没落」はまず，最初の18行で，詩人の詩についての考えを述べた後，物語がはじまり，詩人は夢の中で楽園から寺院へ行き，そこでモネータという巫女に出会い，その巫女を通してハイピ

ァリァンの没落とアポロの神化の物語を「見る」という構成になっています。だから「没落」は純粋にハイピアリアンの没落とアポロの神化の物語ではなくて，これらの二つのテーマは「没落」の一部をなしているにすぎません。しかし，一部といっても重要な要素です。それは詩人の人間的成長に重要な役割を果すものとして描かれています。

「ハイピァリァン」において，キーツは登場人物の心理，動作，及び出来事を時の経過に従って客観的に物語ることだけに終始しておればよかったのですが，「没落」において，彼は，詩人即ち，自己自身の人間的成長を描くことと，ハイピァリァンの没落とアポロの神化の物語の進行との二つのことにエネルギーを使わねばなりません。「没落」において，彼は物語の語り手ですが，単なる語り手ではなく，その物語から影響を受けます。そして影響を受けて変化した自己を述べなければなりません。即ち，物語を述べると同時に物語と相互作用を行う自己の姿をも述べなければなりません。さらに，その物語は不死の神々の物語であり，不死の神々の姿を前にしているのは死すべき人間である彼なのです。彼は不死の神々と死すべき運命の人間との相違も述べなければなりません。神と人間，この次元の違ったもの，大きな隔たりのあるものを共に描かねばなりません。

この困難さを乗り切る一つの手段として，彼はモネータというサターンに仕える巫女を自己と神の仲介者として登場させています。辞書によれば，

> Monēta, ae, f. 〔moneo〕, the mother of the Muses, a transl. of Gr. *Μνημοσύνη*. (*A Latin Dictionary* by Lewis and Short)

とあり，これはラテン語の動詞 moneo から由来しています。さらにこの moneo をみますと，

> moneō uī, ītus, ēre 〔1 MAN—〕, to admonish, advise, warn, instruct, teach.

の意味があります。モネータは，不死のミューズ達の母であると同時に詩人キーツの admonisher, adviser, instructor, teacher でもあるでしょう。事実，彼女は次のように詩人にわかるように様々なことを教えてやります。

'Mortal, that thou mayst understand aright,
I humanize my saying to thine ear,
Making comparisons of earthly things,
Or thou might'st better listen to the wind,
Whose language is to thee a barren noise,
Though it blows legend-laden through the trees——'

(*The Fall of Hyperion*, Canto II, 11. 1—6)

そして彼女を通して詩人は神々の世界，神々の苦しみを理解します。こういう風に考えてきますと，詩人（キーツ）が自己と神々の仲介者にモネータを選んだということはまことに適切であったと言わねばなりません。

以上のことから，「ハイピァリァン」ではハイピァリァンの没落とアポロの神化というキーツの意図したテーマは，そのまま素直に詩の中に取り入れられていますが，「没落」では詩人の成長ということが主テーマとなったと言えましょう。しかし，残念ながら，私達はキーツのテーマの展開の全容を見ることはできません。それで，以下では，これら未完の両詩の中に見られる中心思想を比較してみたいと思います。

4　残された詩に見られる中心思想

「ハイピァリァン」では，没落に苦しむタイタン達に海神オーシェイナスが宇宙の進化の摂理について述べる言葉，

''tis the eternal law
'That first in beauty should be first in might :'

(*Hyperion*, Book II, 11. 228—9)

そして，その進化にどう対処してゆくべきかという言葉，

'to bear all naked truths,
'And to envisage circumstance, all calm,
'That is the top of soverignty.'

(*Hyperion*, Book II, 11. 203—5)

これら二つの中にその中心思想が表われていると思います。このうち前者について言えば，「エンディミオン」冒頭で，"A thing of beauty is a

joy forever" と語り，「ギリシャの壺によせる賦」の最後で，"Beauty is truth, truth beauty" と壺に語らせた耽美主義者としてのキーツの面目が表われています。「美は真理，真理は美」と大胆な言をはいたキーツは今や美を権力と結びつけています。美が世界を支配すると言っています。

次に，後者について言えば，キーツの理想であった "Negative Capability" の考えを示しています。最初に詩集を出版した1817年の12月21日に彼は二人の弟にあてて書いた手紙の中で次のように言っています。

> ……it struck me, what quality went to form a Man of Achievement especially in Literature & which Shakespeare posessed so enormously——I mean *Negative Capability*, that is when man is capable of being in uncertainties, Mysteries, doubts, without any irritable reaching after fact & reason.

このように "Negative Capability" とは，不安，苦しみなど否定的なものの中にあっても泰然自若としていられる様を言います。

さらに，オーシェイナスの説くこの態度は，キーツがソクラテスとキリストだけが持っていたものとし，自分自身もその境地に達することを願った "disinterestedness"（無私の心）にもつながると思います。

このように，「ハイピァリァン」では美の力と「消極的受容力」，「無私の心」とが中心思想として語られています。

これに対し，「没落」ではさきに見たようにキーツが人間として，詩人として成長するということがテーマでしたが，その中心思想はモネータの次の言葉に表われています。

> 'None can usurp this height,' returned that shade,
> 'But those to whom the miseries of the world
> 'Are misery, and will not let them rest.'
>
> (*The Fall of Hyperion*, Canto I, 11. 147—9)

「この世の苦しみを自己の苦しみとすること」は，1817年に出版された「眠りと詩」で，

> Yes, I must pass them for a nobler life,
> Where I may find the agonies, the strife

Of human hearts :
(*Sleep and Poetry*, 11. 123—5)

と歌った時以来，キーツの心の中にあるものです。人間の苦悩への共感はキーツの多くの詩に見られます。

「エンディミオン」では "A fellowship with essence" で自然との交わりを述べた後，それよりもっと魅惑的なものとして，友情と愛の尊厳が語られます。

the crown of these
Is made of love and friendship, and sits high
Upon the forehead of humanity.
(*Endymion*, Book I, 11. 800—2)

こうして愛と友情が人間性の高みにあることを述べた後，キーツは愛の力の強さを語ります。そしてこの「愛」とは男女の愛とか，特定の人への愛ではなくて，人間性に対する愛です。「エンディミオン」は理想の女性，月の女神，シンシアを求めるエンディミオンの愛の旅を描いています。理想の女性（シンシア）か現実の女性（インドの娘）かという「愛」の選択で彼の心は揺れ動きますが，最後にはインドの娘はシンシアと同一であることがわかります。即ち，人間への愛が理想の愛に通ずることが歌われています。

又，「ナイチンゲールによせる賦」，「ギリシャの壺によせる賦」は，それぞれ，苦悩する人間の姿，限りある人間性の悲しみに対する理解によって裏うちされています。

このように人間の内的世界に深く入りこみ，そしてその世界に共感と憐れみを感じ，広く人間性への愛に生きるというのもキーツの理想の一つです。いわゆる人道主義の面もキーツには強く見られます。この「没落」ではそれが色濃く表われています。言いかえれば，「没落」では美への賛美は影をひそめ，人道的，精神的な面が特徴となっています。これと関連して，詩人とはいかにあるべきか，詩人の社会的役割とは何か——「詩を通して社会に善をなしたい」と日頃心に思い，手紙にも書いてきたことが，

この詩では，形をかえて語られています。そしてこれこそが，「没落」の構成上，それゆえ，テーマにおける「ハイピァリァン」との差異を真に支えるものであると思います。

おわりに

最後に，キーツの描いた苦しみについて触れておきたいと思います。「ハイピァリァン」で，彼は，サターンをはじめとする没落したタイタン達の苦しみ（絶望と悲しみ），没落を目前にしたハイピァリァンの苦しみ（不安と焦燥），アポロの神化の苦しみ（"die into life"，生に向う苦しみ）を描きました。なかでも，この「生に向う苦しみ」はキーツにとって大きな意味をもっていました。彼がこの世を "vale of soul-making" と呼ぶ時，この世の苦悩は魂を形成するのに大切な働きをなすのです。他方，「没落」では，サターンとハイピァリァンの苦しみの他に，モネータの苦しみが描かれています。決して終ることのない神の苦しみを彼は深い理解をもって描いています。

Then saw I a wan face,
Not pin'd by human sorrows, but bright blanch'd
By an immortal sickness which kills not ;
It works a constant change, which happy death
Can put no end to ; deathwards progressing
To no death was that visage ;
(*The Fall of Hyperion*, Canto I, 11. 256—61)

そして，又，神の苦しみだけでなく，人間の苦しみも表現されています。第一に，不死の階段を登る詩人の苦しみ＝死をかけた生に向う苦しみ（"die and live again"），即ち，アポロの苦しみに似たもの，第二には，悲しみに動かぬ神々の苦悩の姿に耐える弱い人間の苦しみです。

Without stay or prop
But my own weak mortality, I bore
The load of this eternal quietude,
(*The Fall of Hyperion*, Canto I, 11. 388—90)

この両詩において，キーツは神々の苦しみと人間の苦しみを深い理解と共感をもって描いています。このことはキーツがギリシャ神話に新しい意義を与え得たことを証明していると思います。

以上，両詩のテーマからの比較，検討を終ります。次回には，共通の詩行について考察する予定です。

註(1) このことについては，E. de Selincourt (ed.), *The Poems of John Keats* (8th ed.; London : Methuen, 1961) の p.515, *The Fall of Hyperion* の註及び p.582 の Addenda-Notes を参照して下さい。

(2) H. W. Garrod (ed.), *The Poetical Works of John Keats* (Second ed.; Oxford : the Clarendon Press, 1966), p.64. 以下キーツの詩の引用はこのテキストからです。

(3) H. W. Garrod, *op. cit.*, p.190.